

育つ環境をつくり、 古の技と心を伝える

株式会社 鷗工舎 総棟梁
おがわ みつお
小川 三夫

1947年、栃木県生まれ。高校卒業後、仏壇職人などを経て、法隆寺・西岡常一棟梁の内弟子となる。法輪寺三重塔、薬師寺金堂再建などに副棟梁として携わる。77年に鷗工舎を設立、弟子を育てながら多くの寺社建築を手掛ける。2003年、「現代の名工」に選ばれる。07年に引退した後は、後進の育成に力を注ぐ。著書に『不揃いの木を組む』、『棟梁』など。



共同生活で修業すること

宮大工の棟梁として独立した1977年に鷗工舎という寺社建設会社を立ち上げました。以来、育つていった弟子たちは120人くらいでしょうかな。今は代表を退き「総棟梁」の立場で後進の指導などにあたっています。鷗工舎にはここ（栃木県塩谷町）のほか奈良と九州にも拠点があり、全国から弟子を受け入れており、今は約20人が働いています。弟子たちは、私を含めた全員が寝食をともにする共同生活を通して仕事を覚えます。木の一本一本が不揃いなと同じで、彼らもみんな違う。一緒に暮らしながら仕事をすると、互いが互いを深くわかりあうことができる。そうすると現場の雰囲気、あれ、何かあつ

たな、など不思議に伝わってくるのです。

朝は5時半に起きて朝食の支度。これは入社したばかりの若手の担当です。全員分、三食つくる。買い物も、翌日の下ごしらえもする。夕食が終わったらみな、自分で使う鉋の刃を研ぐなど、道具の手入れも自主的に行っています。大変じゃないかと言う人もいますが、職人になりたい気持ちがあれば当たり前。入ったばかりで大工の仕事はできないけれど、給料は払われるのだから、みんな少しでも早く仕事を覚えようと、一生懸命です。

このあいだ、弟子入りを希望する高校生が来たのですが、学校からこちらには「求人票を出して、職安を通してくれ」と言われる。その子のやりたいようにやらせたいの、と思う。子どもたちの身になって考えている先生も、もちろんいます。働きはじめてからしばらくして、そつと教え子の様子を見に来た黙って帰っていった先生もいました。

今の社会は、自分がよければいい、自分の仕事や役割はここまで、という考え方が目立ちます。昔、先生方を対象とした泊まりがけの研修で講演したことも何度かある。共同生活をしながら研修し、そこでお互いにいろいろなことを話し合っている先生たちの、生き生きとした表情をよく覚えています。まるで子どもに戻ったみたいなきぶんだったんじゃないかな。そんな経験をした、子どもの気持ちに寄り添える先生が、もっと増えたらと思っています。

育てるのではなく、育つ環境をつくる

私が宮大工を志したきっかけは、修学旅行で訪れた奈良で見た法隆寺でした。これはすごいと思った。きらきら輝いて見えました。今のようないろんな道具もないのに、どうやってあのように巨木を運び、建物を組み上げられたのだろう？ 先生から、「お前らは馬鹿だ、ちゃんと将来を考える」などと言われてばかりだったこともあり、「ああ、これを職業にしよう！」と思ったのです。

高校卒業後すぐ、法隆寺の西岡常一棟梁に直接弟子入りを願いました。当時の宮大工は仕事がなく、「この仕事では食っていけないから」と断られました。それでも諦めずに長野県の仏壇屋で修行したり、島根県の日御碕神社で図面を描く仕事をしたりしながら、ようやく21歳のとき、西岡棟梁のもとで働くことを許されました。

西岡棟梁のもとで働きながら仕事を学んだといつても、直接指導を受けたのは一度だけ。あるとき、鉋を引いて見せてくれて、鉋屑とはこういうものだと言われました。その薄くてみごとな鉋屑を、私は窓ガラスに貼りつけてみました。そして同じようにできるよう、刃物を研いでは削り、を繰り返して練習したのです。だから私も弟子たちも、新人に手取り足取り教えることはありません。本人が気づき、やりたいと思うことが大事。それが自分で学びたいという気持ちにつながる。育てるので



総棟梁の厳しくも温かいまなざしに見守られながら、黙々と仕事に取り組む若い弟子たち（鶴工舎栃木本社にて）。

はなく、育つ環境をつくることが重要です。

■ 知恵があるから、挑む力になる

木にはそれぞれに癖があります。大工は年輪を見てこれは右に曲がりそうだ、などとその癖を読みながら組んでいく。一番よいのは、木を静かに置いておくこと。長く置いておけば癖が自然に出る。でも、今はそのための時間が無いから、昔よりもずかしいですね。

人も木と同じく不揃いで癖がありますが、それを他人が直すことはできない。自分の悪い癖に気づき、自分から素直に直そうと思うようになれば意味がない。それにもやはり時間がかかる。でも、今の学校や会社を見ると、忙しくて余裕がない。素直さを殺してしまうような教育に見えます。

学校は知識を教えますが、職人が学ぶのは知識ではありません。法隆寺をつくるるとき、人々はその癖をつくる知識をもっていないなかつたでしょう。その場で頭を使い、なんとか山から巨木を切り出して運び、それを組み上げました。そういう「知恵」があったから、完成させることができたと思うのです。

木の運び方や組み方も、やがて知識となり伝わりますが、知識だけでは、決して法隆寺を超えるものではない。それに対

して知恵は限りなく湧いてくるものだから、こんどはまた東大寺大仏殿のような大きな建物をつくるができる。そうやって新しいものに挑む力が大切だと思っています。私たち職人が学ばなければならないのは、まさにこのような知恵なのです。

■ ほっとけ、ほっとけ、仏の心

西岡棟梁のところに弟子入りして5年もたないころ、法輪寺（奈良県）三重塔の再建工事で副棟梁（棟梁代理）を任せられました。今の能力より少し上の仕事を任せて伸ばす、という西岡棟梁のやり方です。今の鶴工舎も同じです。任せたら、弟子のやり方にあるこれと口を挟まない。指導を始めると、やり方が違う、間違ったなどと怒ることになってしまふ。弟子たちも指示待ちになったり、指導されたやり方以外はできなくなったりするでしょう。もちろん任せるためには、しっかりと上に立つ者が責任を負う必要があります。

棟梁というのは、まさにその責任を負うということなんです。大工だけでなく左官や瓦職人なども束ね、現場のすべてを判断しなければならぬ。リーダーにもいろいろあるだろうけれど、やはり「あの人のようになりたい」と思われる、自然と上に担がれるような人間でなくちゃだめです。そのためにも、やはり面と向かって教えるのではなく、背中教えるようなやり方ではないといけない。「教える」は入口でしかない。もっと深く入るためには

「教えない」ことが大切。最後はほうっておくんだ。ほうっておくと、向こうから一生懸命になって追いかけてきたりするでしょう？

「ほっとけ、ほっとけ、仏の心」。これは以前、私がつくった言葉です。ほつたらかしとは違うので、ほうっておくほうが意外に大変だったりもするのです。

■ 古い建物から感じるのは美しさだけではない

26歳でいきなり副棟梁を任せられても、毎日の仕事はやり甲斐があり、何よりも楽しかった。ここまで仕事を続けてこられたのも、知恵を働かせて新しいものをつくる仕事が好きだったからです。そして経験を積んだ今、法隆寺や薬師寺などの古い建物を見ると、千年以上も前の人々がどんな道具を使い、どんな工夫をしながらその建物をつくったのか、まるで目に見えるようにわかる。鶴工舎も、そこまで感じ取れる職人が育つ場であってほしいと思っています。

子どもたちは大工じゃないから、それはわからなくていい。奈良の古いお寺を見ても、べつに美しいなあと思わなくてもいい。「これは〇〇様式」などと知らなくてもいい。でも今のような道具がなかった時代、木を運んで建物をつくるのがどれほど大変だったか、それをつくった人はすごい！と感じ取れるような人が増えてほしい。そのためには、知識ではなく、自分の意志で何かに挑んでみるのが大切だろうと思います。